

100人分の笑顔 写真集に

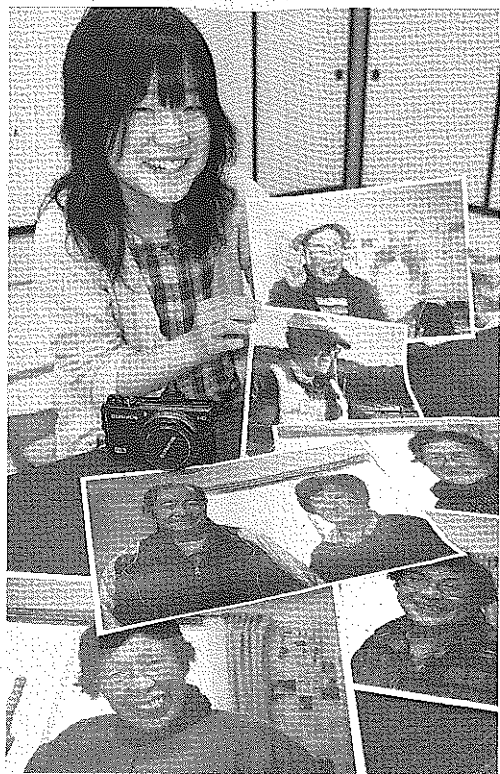
大槌の女子高中生 企画から製作まで

〈岩手〉東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた大槌町で、町民100人分の笑顔を書いた写真集の製作が進んでいる。「ただ、みんなに笑顔になってほしいなって」。企画から製作までを手がける同町の高校2年、釜石望鈴さん(16)は、作品にかけた思いを語る。(渡辺陽子、写真も)

写真集作製を模索し始めたのは昨年の秋。同町などで教育支援を行うNPO法人「NPOカタリバ」のプロジェクトに参加し、「大槌のために、今、自分に何ができるのか」と考えたことがきっかけだ。友人からの「好きな写真を生かしてみたら」との声がけで、計画がスタートした。

中学のときから写真に興味を持ち始めた釜石さん。震災後は大槌町の記録を残そうと被災地の風景などを撮っていたが、人の写真を撮り始めたのは最近のこと。震災後、写真を通じて知り合ったフォトジャーナリスト、安田菜津紀さんの、カンボジアの子供たちを写した作品がきっかけだった。「貧しい暮らしとわかる風景の中で、子供たちが笑っている、その笑顔に胸がぎゅっとなる感じがしたんです。この子たちに会いたいと思いました」

積極的な性格ではなかった釜石さんだが、写真から受けた衝撃が原動力になって昨年8月、安田さんの主催するカンボジアスタディツアーに参加。実際に子供



町民の笑顔を書いた写真100枚を、写真集にまとめている釜石さん。「見た人みんなに笑顔になってもらいたい」――石手県大槌町

見た人 楽しい気持ちになってくれたら

たちと触れ合い、写真を撮影した。「悲しみや喜び、感情が伝わってくる。見る人によって感じ方も違う。人を撮るのって楽しい」。そのときの経験が、写真集の企画にもつながっていた。

写真集の撮影を始めたのは昨年10月ごろ。「カタリバ」を通して釜石さんの活動を知った神戸市の写真店から「神戸」でも震災があり、何か協力したかった」と印刷資金の支援の申し出もあり、写真集千部の製作費用にもめどがたった。

仮設住宅の集会所やイベント会場などに出かけては町民に声をかける。カメラを構えると、照れくさそうだったり、うれしそうにピースサインを作ったり、反応はさまざま。だが、シャッターを切る瞬間には、居合わせたみんなが必ず笑顔になった。「笑顔ってすごいパワー」。そんな場面に会うたび、釜石さんも思わず、うれしくて顔がほころぶという。

写真集は6月をめどに完成させ、撮影に協力してくれた町民や関係者らにお礼として配布する予定。釜石さんは「見た人みんなが楽しい気持ちになってくれたらいいな」と期待している。